

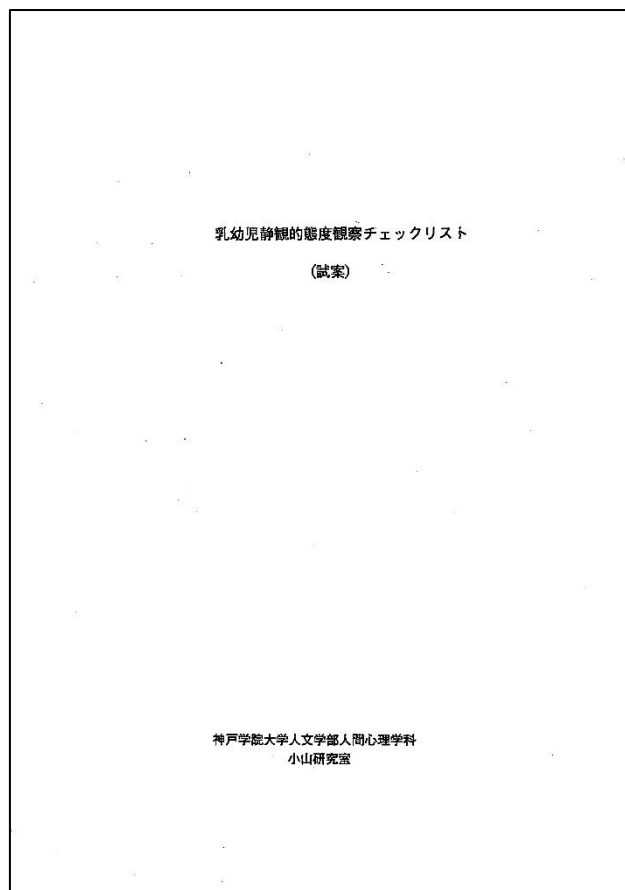
神戸学院大学人文学部研究推進費による研究成果

2015年8月31日

神戸学院大学人文学部人間心理学科 小山 正

1. 2004年度（個人）自閉症スペクトラムの子どもの静観対象の形成と言語獲得に関する研究

2004年度は、自閉症スペクトラムの子どもと知的障がいの子どもを対象として、遊びの中での行動観察から、『乳幼児静観的態度観察チェックリスト（試案）』を作成し、このチェックリストは現在も使用している（資料1）。Hetzer-Weihemeyerの図版（Werner & Kaplan,1963）を用いて、子どもの静観的態度を注視、そばにいる観察者への反応等記入できるようにした。また、絵カードの命名、対物操作についても観察するように作成した。



資料1 乳幼児静観的態度観察チェックリスト（試案）

2. 2005年度(個人)自閉症スペクトラムの子どもの前言語期における対物行動に関する研究

2005年度は、前年度の『乳幼児静観的態度観察チェックリスト(試案)』にもある子どもの対物行動について行動観察を行い、言語獲得との関連を検討した。その一部の成果は、小山(2006)に示した。

『乳幼児期における認知と思考の発達』 小山 正(編著) 『乳幼児臨床発達学の基礎—子どもと親への心理的サポート—』 第2章, 23-41, 培風館, 2006年

①前言語期における対物活動

健常の乳児では、生後6か月前後になると、身近な物へのリーチングが盛んになり、子どもの能動的な物への働きかけや物と物との関係づけを通して、対象についての認識が深まっていく。そして、対象認識は人との世界と結びつき、生後9・10か月頃になると、人との関係性のなかでさらに対象認識が進み、人に共通する行為・経験についての理解とともに物の慣用的操作(社会的な使用)が可能になってくる。このような対物活動は、その後の言語獲得の動作的認知基盤になっていると考えられた。そして、人との関係性といった場合に、それは、生活を共にする人との相互交渉の過程で、子どもは人に対する基本的な信頼感を形成し、それを核にして外界を認知していくといえる。

相互交渉というのは、相補的かつ双方向的なものである。そして子どもの側からいえば、相互交渉の過程で何かインパクトを受けるものがある。その後の子どもの発達にインパクトを与えているものが何なのかを、相互交渉を分析するときには必要であろうと筆者は考えてきた。相互交渉のなかで子どもの発達のいかなる側面がどのように変容していくのかを明らかにしていかなければならないと考えている。前言語期における対物行動の発達はその過程を見るひとつの窓であるともいえる。

生後8か月頃になると、物の姿が見えなくても、その物が存在していることがわかるようになる。これを「物の永続性」の確立と呼んでいる。物が物として存在していることが赤ちゃんの行動からはっきりと見てとれるようになる。このような物の永続性の確立後、次第に目的と手段との関係理解や因果性の理解の発達が、物と物との関係づけのなかで発達していく。

研究協力者であるKは、ダウン症の女兒で現在1歳8か月で筆者が発達指導を行った事例である。Kが手にして操作していた物を筆者がもらってある場所に隠してみると、そこから探し

出してまた手による探索やKが好きな「放る」という遊びの対象とする。筆者が隠した場所から探し出すというKの行為のなかに物の永続性が育っていることがうかがえる。その後、物に対しての手による探索がみられ始める。また、手にした物を放るという行為も、放った後、その物の動きをじっと見るといったことがみられるようになった。注視もしっかりしている。このような行為に因果性の理解が進んでいることがうかがえるのである。それとともに手にしている物がある物の中に「入れる」という行為がみられ始めた。そして、何か欲しいものがあると、自分で何らかの手段を講じて手に入れようとするような行為も盛んになってきている。

Kは、これまで「物を出す」という行為を繰り返すといったことがみられた。母親も出してばかりでなく、「おかたづけをしなさい」と言っていた。一見、単純な行為の繰り返しのなかで物の因果性や目的と手段の関係の理解が進んでいくのである。

このような認知発達を基礎に物の社会的な使用（物の慣用的操作）が始まる。その物の用途に合った扱いがみられてきた。たとえば、Kは養育者との間で、模倣遊びを楽しむことがみられ始めた。模倣、特に動作の模倣は、他者と同型的な活動を楽しむなかで、他者が自らと同じ行為するという認識の発達を促進する。模倣を通して、物の用途、社会的な使用が進んでいく。Kにおいてもスプーンでカップの中をつつくといったような行為や玩具の車を押すといった行為がみられ始めた。

乳児期の後半には、このように模倣や観察学習を通して人を取り入れていく面もあるが、自らが行為を適用するなかで物の認識が進んでくる。表2は、乳児期における子どもの物の操作スキルが変化する契機として考えられることをまとめたものである。障害のある子どもの乳児期の療育では、遊びのなかでこのような物の操作スキルの発達を考えていくことが必要である。

ある2歳2か月の自閉症スペクトラムの子ども(男児)である。筆者が発達相談を受けている事例である。この2か月間において、母親への身体的接触や親を巻き込んで遊ぶことが頻繁にみられ、それとともに物の慣用的操作やふりが見られ始めた。また、指さしも出現した。そしてこの事例は、今、自分が興味あることを母親にさせることが頻繁にみられた。このことは特定の人を通して対物行動が発達し社会的使用が広がっていくことが、このような事例の発達をみて明らかとなった。

②言語獲得期の対物活動

また、自閉症スペクトラムの子どもの言語獲得期の対物活動として、過渡的対象の発達の意義を明らかにし、『言語獲得期にみられる過渡的対象—自閉症の事例を通して—』として日本特殊教育学会第46回大会（2006年10月、群馬大学）にて口頭発表した。

3. 2007 年度（個人）自閉症スペクトラムの子どもの言語獲得期における対物行動の発達に関する研究

自閉症スペクトラムや知的障害がある子どもと、健常児を対象に言語獲得の基礎にある他者認識や認知の発達、親の養育態度等についてわれわれが集積した資料を基に、言語獲得期における認知発達の様相を明らかにし、環境、ことばの遅れなどこの時期にある子どもの発達の様相を探り、有効な言語発達支援の方向性を考えることを示し、その成果を日本発達心理学会第 20 回大会、自主シンポジウムを開催し、成果を公表した。

4. 2008 年度（個人）障害のある子どもの家庭における環境と子どもの言語・認知発達に関する研究

筆者が発達相談を行っている地域の 1 歳 6 か月健診後のフォロー幼児教室に参加している保護者・子どもを対象とした。今回の報告では、自閉症スペクトラム、知的障害と考えられる事例は除外し、言語の開始、ことばが遅れている事例 18 例（1 歳 6 か月～2 歳 6 か月、男児、13 例、女児、5 例）を対象とした。手続きは、幼児教室において、「家庭における遊びとことばに関する調査票」（小山・中川,2009）を配布し、母親に記入してもらった。調査票は、50 項目からなり、回答は、「(1)まだみられない」「(2)最近みられかけた」「(3)よくみられる」の 3 件法となっている。③分析の方法：各項目における通過傾向を調べ、(1)から(3)の回答に 0, 1, 2 の得点を与え、項目間の相関を求めた。分析には、SPSS Ver.15 を用いた。

この結果は、日本心理学会第 73 回大会において発表した。

これまで推進費によって集積した自閉症スペクトラム子どもの資料を中心に、言語獲得期の遊びの中でなされる認知発達と言語獲得との関連性について述べ、自閉症スペクトラム幼児の言語獲得期の遊びの中での認知発達の特異性について報告した。

また、その結果は、神戸学院大学人文学部紀要第 29 号（2009 年 3 月）に掲載した。その概要は、日常的な遊びの中でなされる認知発達と言語獲得との関連性に関する資料を集積してきた。ここでは、そのような資料から遊びの中での認知発達をとらえるひとつの方法として実施した津守・稲毛式乳幼児精神発達質問紙結果を基に、認知発達と言語獲得との関連性について検討した。その結果、ごっこの広がりがある後の造形的な遊びにつながっていくこと、ごっこ等の象徴的活動には、感覚的なものをベースにしながらも子どもの能動的関係づけが関係して

いること、次に構成的な遊びと収集的な遊びとの関連性である。さらに、感覚的なものをベースにした能動的な関係づけが道具の使用や感覚的な遊びの持続と関連があることである。そして、このような遊びの中での探索的・認知的発達と言語発達の諸側面と関連があることが示唆された。

5. 2010 年度（個人）言語獲得期にある子どもの遊びの中での認知発達と言語獲得に関する研究

『乳幼児期のことばの発達とその遅れ』

(小椋たみ子・小山 正・水野久美著, ミネルヴァ書房, 印刷中)

第 11 章第 1 節, 216-218

三項関係を超えて

対象のもつ力動性や方向性といった対象の表現性への感受性は、象徴的意味の構成を可能にする人間の質であるとマツキューンは述べている (McCune,2008/2013)。対象の表現的質を知る態度がはるかに優れていること (超越性) はヒトの象徴化の発達の基礎になっていると考えられる(図 1)。

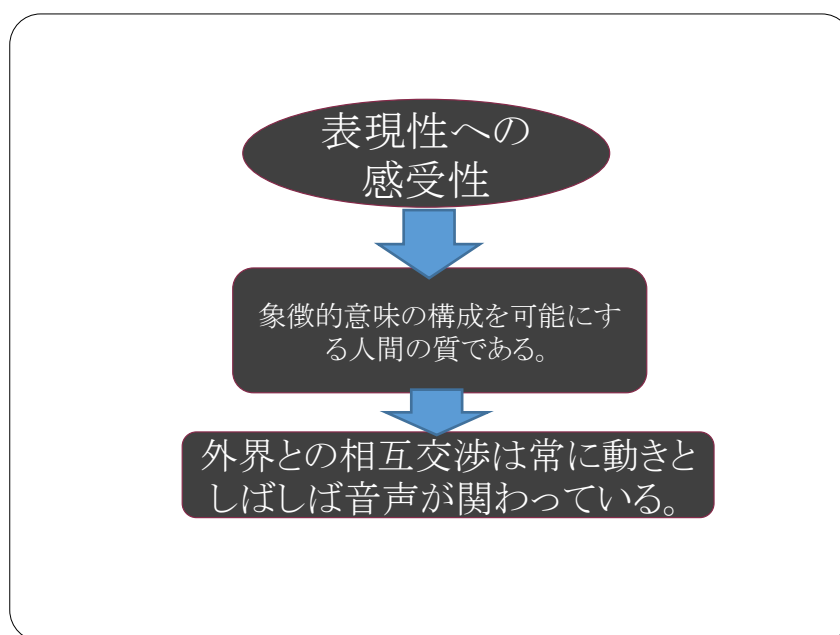


図 1 表現への感受性 (McCune,2008/2013 より著者が作成)

原初的な共有状況から発達して、子どもは物を介して人と交わり、人を介して物と交わりといった関係性を楽しむようになる。一般にこのような関係性を「三項関係」といい、ことばの獲得の基礎として注目されてきた (やまだ, 1987)。このような三項関係の中で、子どもと物との関係において、たとえば、対象の表現性への感受性を大切にすることが、後に言語による表現の豊かさにつながっていくと今日の言語発達研究では注目されている (McCune, 2008/2013)。保育・教育場面でのわれわれの関わりの意味の問い直しのために図 2 を基にして、いかに㉑から「関係づけ」や「創造性」につながっているかを日常生活において考えていくことが、子どものことばの発達支援においては重要であろう。

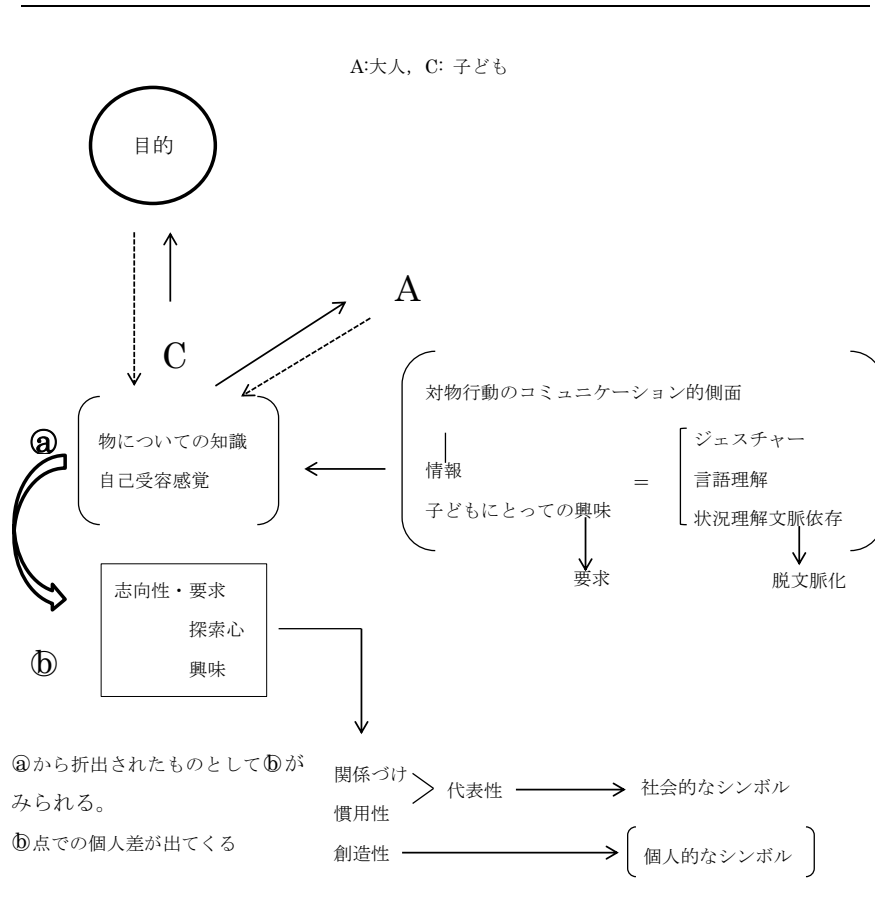


図 2 三項関係において配慮する点

6. 2011 年度（個人）乳児期後半にみられる静観対象の形成と言語の獲得

静観的態度の形成や象徴化の共有と、空間語彙理解等の言語理解との関連性については、今後さらに検討し、静観対象の形成と言語の獲得の問題をさらに明らかにしていきたいと考えてきた。本研究では、自閉症スペクトラムの子どもの事例を中心として、対物操作、発語・言語理解の状況、静観的態度、そして他者との象徴化の共有といった他者認識の観点から、特に静観対象形成前後の子どもの物(対象への知識)について障害のある子どもを対象として検討した。

本年度は、静観対象形成以前の行動物としての対象操作に注目し、愛知県の通園施設に在籍する約 30 例の前言語期から言語獲得初期にある障害のある子どもを対象として、静観対象の形成と言語・認知発達に関して資料を収集した。個別観察の下、子どもと筆者との遊びのなかで、こちらが用意した玩具を提示し、対象児の対物行動の発達に関する資料を集積し、それらの結果と子どもの言語発達の諸側面との関連性について検討した。言語発達については、各対象児に関して、療育者より日常療育場面での発語を調査し、観察場面での子どもの自発語を分析した。静観対象の形成については、これまで同様、Hetzer-Wiehemeyer 図版への反応を調査した。この結果については未発表である。

さらに、本年度は、昨年度の研究に引き続き、知的障害児やダウン症児の静観対象形成時期の日常生活における初期の空間語彙の理解と動詞理解との関連性を明らかにすることを目的として、これまで集積した資料から、家庭における理解語記録シート(母親記入)の資料を基に検討した。

本研究の成果は、「言語獲得初期における空間語彙と動詞の理解との関連—ダウン症の事例から—」の題目の下に、『音声言語医学』第 53 卷 2 号（査読有）、2012 年 4 月に掲載されている。

本研究では、ダウン症児の日常生活における初期の空間語彙の理解と動詞理解との関連性を明らかにすることを目的として、家庭における理解語記録シート(母親記入)の資料を基に検討した。その結果、「もらう」「あげる」「行く」「食べる」「もって来る」「もって行く」等の動詞の理解があって空間語彙の理解がみられ始めた。空間語彙については、2 歳 5 か月 10 日から 2 歳 11 か月 27 日の期間に「～の中に」「ここ」「～の上に」「あそこ」の順に理解された。「～の下に」はやや遅れ、3 歳 3 か月 6 日に理解がみられ、並行して「立つ」「ふく」「片づける」「消す」「閉める」の動詞が理解され始めていた。以上の結果から本研究で対象としたダウン症の事

例においては、初期の空間語彙の理解が動詞理解と並行し、自らが行為することや移動・運動の過程で空間語彙の理解が進展していると考えられた。

7. 2012 年度（個人）初期言語獲得期における養育者による子どもの認知発達評価の国際比較

家庭での子ども遊びに関する調査用紙を改訂し、英語版を作成した。

本年度は、国際比較に向けて、ASD の子どもの初期言語の特徴について以下の題目で日本音声言語医学会にて発表した。

『自閉症スペクトラムの子どもの理解語彙と表出語彙にみられる対称性と非対称性』
(音声言語医学, 56 巻 1 号, 52 頁) に掲載。

8. 2014 年度（個人）知的障がいがある子どもの初期言語発達における安定性とその要因

表出言語の出現が著しく遅れている事例への **good language development** の観点から言語獲得発達支援の中で、ダイナミック・システムズ理論からのアプローチは有効であると考え、有意味語がなく、知的障がいが高く全体的な発達に遅れがある事例への言語発達支援を行った。その結果、前言語的伝達の量的側面がアトラクター状態を示し、その安定化が言語獲得につながっていくことが示唆され、身振り表現との広がりとの関連を今後検討していくことが必要であると考えられた。

『言語獲得に遅れがみられる子どもへのダイナミック・システムズ理論からみた支援』
(音声言語医学, 56 巻 1 号, 12-19, 2015 年 1 月, 査読有り) に掲載。